異世界冒険譚（あなざわーるどあどべんちゃー）

Riko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界冒険譚（あなざわーるどあどべんちゃー）

【Ｎコード】
Ｎ５９５９Ｗ

【作者名】
Ｒｉｋｏ

【あらすじ】
ある朝目覚めたら、そこは檻の中だった……！？どうやらそこは異世界。そして、そのままだと処刑される？？女子高生・松浦里菜は理由ありの王子や従者と一緒になって逃げ出すが……。
※　過去に一部自費出版したことがある作品を完結させようと思って自サイトで書き始めました（したがって重複投稿です）。が、そちらもやはり進捗が止まっているので、掲載場所を変えて仕切りなおしと考えました（こちらのシステムの方が、自らに対する強制力が働く気がして……）。

一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で

ある朝目覚めたら、そこは檻の中だった……。

十秒ほど目をつぶってみた。……開けた。
うーん、見間違いではないらしい。
ちょっとほっぺをつねってみた。痛い。
うーん、夢でもないらしい。
そうだ、それに考えてみれば私って、ほっぺたをつねるって事を思い付くって事自体、現実だという証拠だっていう持論の持ち主だったっけ。っていうことは……やっぱりこれは現実なんだ。

私、松浦里菜。高校三年の十七歳。――万が一、罪を犯したりしていても、十分少女Ａで済む年齢。
なのに、この状態はなんなんだ～～。

頭を悩ませていたら、足音が聞こえた。それとともに一つの、疑問解決策が頭に浮かんだ。ここに来る人に尋ねればいいんだ、とい

う、ごくごく単純な解決策。
足音は、ますます近付いて、この檻のある部屋のドアの前で止まった。
ドアの鍵を開ける音がし、――けど、なんていう厳重さだろう！檻には錠、部屋には鍵。私は余程の凶悪犯なんだろうか……。――そして人が入ってきた。
……なんだ？おい、私は髪を真っ青に染めた奴なんか趣味じゃないぞ！大体、そんなど派手な頭した奴が公職についていいのか？……と、あれ？公職じゃないのかもしれないなあ。
私は今まで、私が悪人ってケースしか考えなかったけど（だから檻の外の人は公務員だろう、と思ったんだけど）、反対のケースも考えられるわけだ。――つまり、私を檻に入れた人のほうが悪人だってケース。けどうちは身代金目当てに誘拐されるような金持ちじゃないし、金目当てじゃないにしても――あの後生楽なうちの両親が、子どもをさらわれる程恨まれてるとは思えないし。ましてや私は何かの事件の目撃者とかでもないし、ただ家で寝てただけなのに人質にとられたわけでもないだろうし。……うーん、やっぱり訊いてみるのがいちばん手っ取り早いわ。
で、声をかけようとしたら……閉口してしまった。何故か、というと、部屋に入ってきた人（どうやら食事を持ってきたらしい）が、いきなりもんのすごい早口で喋り始めたから。――それもどこのなんだかわからない言語で。
――何を言われているか、はわからない。けど悪口を言われてるのはわかる。人間なんてものはわりかし悪口には敏感なものらしいしね。大体、あの顔を見て、誉めているんだ、なんて言われても誰が信じるもんか！
全く。これで唯一の解決策もダメになっちゃったじゃないか！
あ、だんだん腹がたってきた。勝手に閉じこめられて、理由も教えてもらえず、その上、なんで悪口まで言われなきゃならないんだ

！おとなしく聞いてることはない。叫んでしまえ！
「わけのわからん言葉で人の悪口言わんでくれ！！！」
向こうにもこっちの言葉は通じなかったに違いないがあまりの剣幕に恐れをなしたのか、その男は檻の向こうに食事を置いて、さっさと退散した。

食事っつったって、そんな大したものではない。パンらしい固形物と木の器に入った透明な液体が、木製のお盆にのっかっているだけ。
うーん、私、ロールパンの類って焼かないと食べられないんだよね。食パンなら焼かなくても何とか食べられるんだけど。
だからこの液体だけいただこう。――多分水だよね。変なもん入ってないだろうなぁ。
で、檻の隙間から手を伸ばして器を取って、ごくっと一口。――あら、この水おいしいわ。薬くさくないというか。
もう一口、ごくっ。

それにしても、一体ここはどこなんだろう？

一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で（後書き）

最初の一行は本当は序章なのですが、一行での投稿ができないので、第一章の第一話とくっつけました。

二、ありそうになくてもある国の

先程の男が、手に何か機械らしき物をのせて戻ってきた。どうやら、私の剣幕に恐れおののいて逃げ帰ったというわけでもなかったらしい。

ふむ。さっきは混乱してたせいか髪の色にしか気付かなかったけど、こいつってば服装も変だ。ファンタジー系の漫画あたりで兵士が着てるような服だもん。少なくとも現代服じゃあない。……まさか、これが今のはやりだってことはないよね。私、流行には疎いけどさ……。

その男は、手のひらの上の、四つの機械のうち、二つを檻ごしに私に渡し、残り二つを慣れない手つきで自分の耳にはめた。そして、どうやら私にも同じようにしろ、と身振り手振りで言ってるようなので、私も両耳にはめた。感じとしてはイヤホンに似てる、かな。イヤホンにひもがついてなくて、かわりに金具がついていて、その金具で耳たぶにとめるようになっている。

「女、わかるか？」

と、その男の声が日本語になって聞こえた。

どうやらこのイヤホンもどきは翻訳機らしい。便利なものだ。こんな物がいつ世の中に出回ったんだろう。通訳さん可哀相に。失業するな。

「おい、女」

……女、などと呼ばれてむっとしたので、ぶすっと答えた。

「何よ、聞こえてるわよ」

「お前は魔だな？」

思わず、一瞬絶句。

「……あんた、頭大丈夫？何をどうしたら、そーゆー滅茶苦茶な発言が飛び出すのよっ！」

「魔じゃないというのなら、言ってみろ。どこの国の者か、何故王

子の前に現われたか、どうやってあんな風に突然出現できたか」
「――出来るだけ忠実に答えたげるわよ。私は日本国ってところの者で、あとは知らない」
「……それのどこが忠実なんだ?!」
「知らないもの、知らないって答えんのが一番忠実でしょうが！大体、ここがどこかすら知らないっつうのに。――ま、言語からいっても、王子なんてのがいるらしいことからいっても、日本じゃないらしいけど?」
「ここはプリチュ王国の王宮の地下牢だ。お前はいきなり中庭にいた王子の目の前に現われた。それで王子の護衛をしていた俺がここに運んだ」
「ああそう。そりゃ御苦労様」
と、私はぷいっと横を向いた。こーゆー事態の起こり得る可能性を、もう一つ思いついたからね。――だけど、わざわざ自分ちの布団で寝ていた私を起こさないように運んで牢の中に入れて、こーゆー大がかりな芝居をやるような心当たりは、ない。
だけど、私がどこかの王子様の前に突然現われた、なんてことを信じろって方が――
でも、現実・らしい。
あううっもう開きなおってやる！（もう既に開きなおってる気もするけど）
「おい、女」
「何よ、女女ってうるさいわね、男。確かに私は女だけど、ちゃんと松浦里菜っていう固有名詞があるんだからねっ！」
「まつうらりな?舌を噛みそうな名前だな……。不便このうえない」
「呼ぶ時は里菜でいいの！松浦は家族名称なんだから。もっとも家族名称で呼ぶ人の方が、日本じゃ多いけどね」
「ややこしいな。――おい、りなとかいうやつ。お前は、そんなのがあるわけがないとすぐわかるような国名でも、一応答えた、ということは、自分が魔だと素直に認めるつもりはないんだな?」

「魔じゃないんだから、素直に認められるわけないでしょうが！それに日本っていう国だってありそうになくてもあるんだから仕方ないじゃないの！」
大体、プリチュ王国なんていうのの方が聞き覚えないわよ。
「――お前があくまでそういう態度をとるのなら、王の御前に連れていくよう、命ぜられているのだが」
「あっほんと？私、王様って会ったことないから会ってみたい」
「……おい、ロッフ王だぞ？人なら誰でも、その顔を見るだけですぐさま死に至り、魔ですらひれ伏すと言われる、ロッフ王だぞ？――この世界の者で知らぬ者など、生まれたばかりの赤ん坊くらいのものだぞ」
「……私知らないよ、そんな王様」
「……お前、赤ん坊か？さもなくばこの世界（テーアリ）の者でないか」
へっ？今、この世界とテーアリってのが二重奏になって聞こえたぞ。――ってことは、「この世界」イコール「テーアリ」っていうもの、な訳？……私の感覚じゃ「この世界」っていうのは……えーっっ。
「ちょっと待った！ここってもしかして地球ですらないわけー？！」

三、松浦里菜っていうただの女の子が

結局、王様と御対面することになった私は、その番人らしい男に、両手首を合わせて縛られ、体と両腕もまとめて縛られ……つまりやたらと厳重に縄でぐるぐる巻きにされた。おまけにお札らしきものまで首からかけられた。――どうやら、私が魔力でも使って逃げるんじゃないか、と思っているらしい。

それでやっと檻と部屋から出してもらえた。（そうしたら部屋の木製の扉にもお札がかかっていた……）出たところで更に目隠しをされ、階段をのぼらされて通路をやたらと歩きまわらされたあと、やっと止まって目隠しを取られた。と、そこは両開きの扉の前だった。

男が叫んだ。

「日本という国の松浦里菜だと主張するものを連行して参りました！」

木製の、いかにも重そうな扉がこちら側に向かって、ぎぎぎっと開く。

見ると、扉一枚ずつに緑髪の兵士（らしき人）が一人ずつついてそれを押していた。うーむ、こういうのもドアボーイというのかな。

中に入る、というより入れられると、そこは広い部屋で、奥の方が薄いカーテンで仕切ってあった。カーテンは天井から床まで、壁から壁まで、余す所なく張られていて、その向こうは全然見通せないんだけれど、影は見える。どでかい椅子らしきものと、それに坐っている男がでんとシルエットを作り、その脇に並サイズの椅子の影もある。

こんなことを見ているうちに、その番人に押されて、カーテンから五メートル位のところで止まらされた。えーと、気分としては正座でもしたいトコなんだけど、そういう習慣なさそうだしなー。妙なことすると、何でも魔扱いされそうだし。ここは一つ、向こうの

言うとーりにしてみましょうか。
――ふと気付くと、右手の壁際にカーテンから頭だけ出して、じっとこっちを見てる青い髪の男の子がいた。小学…六年生くらいかな？なかなかかわいい子だなあ、うん。
あんまり興味ありげにこっちを見てるんで、思わずテレて、ひきつり笑いをしてしまった……。そしたら向こうも少しにこっとして、カーテンの中に顔を引っ込めてしまった。そして、トトトッと走っていって並サイズの椅子に腰掛けると、どでかい椅子に坐っている男と、一言二言言葉を交わした。
えーと、私は王様に御対面しに来たんだから、その男はロッフ王なんだろうな。その隣に坐ってるんだから、あの男の子が、私がその前に現われたって言う王子様なのかな。
そんなことを考えていると、その、多分王だろうと思われる人が口を開いた。
「御苦労。下がってよろしい」
私の隣の男は一敬礼して、まわれ右をして歩いて行った。そしてドアがギギギッと音をたてた。――きっとまたドアボーイがドアを押しているんだろう。さらに少しすると、ドアは再び閉じたようで、足音は完全に消えた。
うーん、置いてかれてしまった。友好関係にあるとはとても言えない相手だけど、唯一会話をした人間だからなー、いなくなると心細い。うーん、一体どうしたら良いんだろう……。
悩んでいたら、カーテン（多分、御簾と似たような働きをしてるんだろう。偉い人とそれ以外を隔てる、という……）の向こうの男が言った。
「――わしがロッフ王だ」
と。
うーんやっぱりこの男が王だったか。顔を見ると死ぬとかいうロッフ王ね。案外、余程のぶ男で、顔を見られると怒り狂って相手を殺すんだったりしてね。ははは。まあ、それにしては王子様らしい

子は可愛かったけど。
「魔よ、私の名において答えろ。お前の目的は？」
「王？陛下って呼ぶべきなのかな……ま、いいや。ロッフ王、その前に私が訊きたい。何だって私が魔だと言うんですか？」
「王子の（と隣の子の方を少し見て）目の前に突然出現するなんて芸当が、魔以外の何に出来る？」
「――一つお訊きしますが、この国ってテレポートとかワープとかっていう概念あります？」
「てれぽおと？何だ、それは」
「私の世界で言われてる、二空間の物体を交換させる能力ですが。瞬間に移動できるっていう便利な力です」
「――その力をお前が持っていると？」
「いえ別に」
「……」
「ただ、突然現われたからといって魔とは限らない、と」
「はん。どっちにしろ、そんなことが出来るのは魔だろうに」
「まあ、エスパーが魔女と言われるってパターンは小説とかによくあるけど、でも……」
「私は、そんな講義を聴くためにお前を呼んだのではない！お前は素直に正体と目的を吐けばいいのだ！！」
「だから私は松浦里菜っていう者で！いつの間にかここに来てたんだから、そもそも目的なんか持ちようがないでしょ！！」
「日本？ふん、そんな国がどこにあるというのだ？」
「そんなこと言ったって、在るんだから仕方ないでしょ！大体聞いた限りじゃ日本でないのみならず、地球ですらないみたいだから、ほかの惑星上に知らない国の一つや二つあっても当然でしょうがっ」
うーん、そうなんだよなー。ここが地球じゃないなんて、信じがたいんだけど、あの番人「ちきゅう？何だそれは」っつったんだよなー。地球って単語だけ翻訳機が変換しないなんてこともないだろうしなあ。それにこの国の人ってみんな髪の毛青とか緑みたいなん

だよね。知ってる限りじゃ地球上にはそういう髪が普通のところってない筈だし……。
そんなことを考えていたら、王はもっと打撃的なことを言った。
「テーアリ以外のどこに人が住めるというのだ！惑星（ホシ）なんて、ただの小さい石ころではないか！」
お、思わず頭痛が……。手を額にやると、あの可愛い王子様が心配して訊いてくれた。
「あのお、大丈夫ですか？」
「ん。ちょっと、この国の文化程度がわからなくて、くらっときただけ」
と、私は答えた。本当だよ、全く。何だって同時言語翻訳機なんて便利な物がある国で、星が石だなんて思われているわけ？よっぽど天文学だけ発展が遅れてるのかな。あ、でも服装とか建物とかを見ても文化程度低そうだしな。……んじゃこの翻訳機は何なんだ。
「トーレ王子。そんな者を心配することはない。それは魔なのだ。――もっとも、魔と通じたかどで投獄されたければ別だが」
トーレ、と呼ばれたその王子は、口を閉じた。――何か変な親子……。
「さあ、魔よ、素直に目的を吐いてしまえ。どこの国に頼まれたのだ、イサジアかラーサか……それともハーレ、とか？」
王子の体が、びくっと震えた気がした。何だろう、気のせいかな。
しばらく間をおいて、王が再び言った。
「いいかげんに何も知らないふりはよしたらどうだ？まだしらをきるつもりなら――顔を見せるぞ」
「見せたら何だっつうのよ」
「……」
「死ぬとか何とかあの番人が言ってたけどねっ、顔を見ると死ぬなんつったら、どっちかっていうとあんたの方が魔なんじゃないの！」
「そうだ」
王はあっさり言った。

「え…」
「私は魔だ。だから人は私を見ると死ぬのだ。――このトーレ以外は」
「何だ。じゃあんなに可愛いのにトーレ王子は魔なのか。残念だなあ」
「トーレは人間だ。憎らしいことに」
「へっ」
「トーレは人間だ。なのに私を見ても死なない。だから私の息子にしたのだ」

三、松浦里菜っていうただの女の子が（後書き）

思えば第1章辺りって高校生の頃書いたのでした。うはあ。

四、プリチュ王になりたくないプリチュ王子トーレと

ガチャッと部屋の鍵が開いて中に入ったところで目隠しと体に巻き付いている縄を解いてもらえた。

ガチャガチャッと檻の錠を開けて、私を中に入れ、ガチャガチャッと錠を閉めたところで番人らしい男が言った。

「手を出せ」

それで檻の隙間から手を出して、両手首を縛っていた縄を切ってもらった。

うー、縄が結構きつかったからな、痕になってる。痛いったら……。

番人らしい男は、部屋から出て鍵を閉めると、そこで番をしてるらしかった。

――どうやら本当に番人になったな。

結局、話が進展しないんで、私を連れていった男がもう一度呼び出されて、私をここに戻したってわけなんだけど……。

うーん一体どういうことなんだろう？？？私がどうして他の星にいるんだろう、って事じゃなくてね。私のことは考えたってきっとわからないだろうから、とりあえず置いといて、あの王子様と王様の事。

どーも台詞から言うと、あの王子は養子みたいなんだけど、かわいくて養子にしたわけじゃなさそうだしなー。憎らしいって言ってたもんね。憎らしくて養子にするっていうのは、一体どういうことなんだろう？

うっうっうっ元の疑問符に戻ってしまった……。この世界の知識がないから考えにくいのかなあ……。

――と。外で足音がしたような気がした。耳を澄ますと――確かに。

それから、番人がその新参者と何か議論を始めたようだった。小

声で話してるんだけど、たまーに番人の興奮した声が聞こえてくるんだよね。「しかし！」とか「ですが！」とか。
しばらくすると声はおさまって、部屋の鍵を開ける音がした。
どうやら新参者は私に会いにきたらしい。誰だろう。今の状況を多少なりとも変化させてくれる人だと有難いなー。
すると、番人の「どうぞ」の声の後に入ってきたのは、トーレ王子だった。
「トーレ王子？！」
叫ぶと、すっと番人が入ってきて、檻の隙間から剣を持った右腕を入れて、刃を私に向けて、言った。
「大声を出すな。トーレ王子はお前との会談を望まれている。――だが、王子をどうにかしてみろ、俺のこの剣が黙っちゃいないからな！」
何かこう、時代劇あたりで聞きそうな台詞だな。――まぁ口答えをしてみる。
「どうにかったって、檻ごしでどうしろっていうのよ」
「――魔であるお前なら、檻をものともせず何かをするかもしれないだろう」
「――檻をものともせず何とか出来るなら、剣つきつけてるお宅なんて、とっくの昔にどうにかなってると思わない？」
「……」
王子がくすくすっと笑って言った。
「もういいよ、ムルー。どう考えてもあちらが正しいよ。――大体、僕にはお前や王の言うように、この人が魔だとは思えないけど？ね、松浦里菜さん？」
やあっと私のことを魔扱いしない人が現われたので、当然私の態度もやわらかくなる。
「里菜でいいです、王子様」
「そうですか？じゃ、僕のこともトーレって呼んで下さい」
「でも、トーレだなんて呼ぶと、許してくれなさそうな人がそこに

いるけど？」
と私は言った。
「構わないよね、ムルー？」
「……王子の御命令とあらば」
ムルーという名らしい、その番人は、しぶしぶそう答え、王子が剣をちらっと見ると、しぶしぶそれをしまった。
王子は続けて言った。
「それに僕は、貴女に仲間になって欲しいんだし」
「仲間？何の？」
「――この国を脱出する、です」
「脱出？！ったって、あなたこの国の王子なんでしょう？だったら何で逃げる必要が……。あ、それにその前に――」
と私はムルーを見て言った。
「この人、あなたにすごく忠実に仕えてるみたいだけど、その前にあの王に仕えてるんでしょ？そういう話して大丈夫？」
「大丈夫じゃなきゃする訳ないだろ」
うっムルーに逆襲されてしまった。そりゃそのとーりなんだけど……。
「大丈夫なんです。表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんですが、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです」
「ん？？？」
どういう事だ？
「ま、ちゃんと説明しますよ。どうやら本当にここの事ご存じないみたいですしね」
それで、やっと私は、ここの知識を多少なりとも得られることになった。
「僕と王が本当の親子じゃないのはもうお気付きでしょう？」
「ん、まぁおぼろには」
「僕はもともと、隣国の、ハーレ王国の王子なんです。――七年前

に、ここプリチュ王国のロッフ王が突然戦争を仕掛けてくるまでは。
何分、ハーレは小国でしたので、大国プリチュの突然の攻撃に耐えられるわけもなく、そのうえプリチュは魔王ロッフを迎えたばかりで勢いにのってましたので、ハーレ王国はあっさりと敗退しました。そして――ハーレ王城にロッフ王がのりこんできました。
城の者は皆、王が来ると目をつぶるなり顔をそむけるなりして、死から逃れました。だけど僕は全然目をつぶらなくて――でもまるで何ともありませんでした。それでプリチュ王ロッフはハーレ王に向かって言ったのです。
『ハーレ王、取引をしよう。もし、この王子を跡取りとしてくれるのなら、全ての者の命ばかりか、貴殿が王として存在することすら許そう。――勿論、毎年何かを納めてはもらうが』
と。要は植民地になれ、ということですが、それをのむ以外に国民を救う手立てはありませんでしたので、ハーレ王は目をつぶったまま、うなずきました。そしてロッフ王は、約束通り国民にも勿論王にも手を出さず、僕を連れて引き上げました」
ううむ…。何てゆーか…えっとぉ…。
「――僕の身柄と引き替えに国が助かった、と言えば聞こえはいい。だけど実際にはそれは、いくらハーレの国力が充実しても、僕という人質がいるために、ハーレ王国は植民国としての生活を余儀なくされている、ということです。……そんなことには耐えられない！！」
子供にしてはやけに淡々と、他人事のように話していた王子は、そこで初めて押さえていた感情を爆発させたようだった。
私の入っている檻につかまって、ひざをつき、うずくまるようにして泣いている――。
ムルーは、泣いている王子をどうしたらいいかわからないようだった。私にもわからない。でも――。
「――ハーレ王国の国力は、この国、プリチュとやらを打ち倒せるほどアップしてるの？」

と言ったら、トーレは顔を上げて答えた。
「はい！ハーレのみんなはプリチュに税を取られてもめげずに働き、貯えはかえって七年前よりも多いですし、戦力も――これは、七年前さっさと敗退した為に、ほとんど無傷だったことが幸いしたんですが――かなりアップしてるとのことですから、僕という要因さえなければ必ず勝てます！！いざとなれば、この命を土に還してでも……！」
ふう。七年前、魔王一人のために国をあけ渡した人々が、いくら戦力アップしたからといっても、勝てるのかなぁとは思うんだけど……黙ってると、実際に自害でもしそうな勢いだもんな。ここはひとつ……。
「わかった」
「えっ」
「やってみよ。ここのこと、全然わからないし、何故お宅が私を仲間に選んだのかも全然わかんないけど」
「あ、それは、あなた色々な事知ってるみたいだったから、絶対この脱出行の力になってくれると思ったし、悪い人じゃないと一目見た時から思ってたし、大体、僕の目の前に現われたんだから、きっと運命の巡り合わせだと思ったし、――何より、いずれ死刑の身じゃ手伝ってくれざるを得ないでしょう？」
……何だって？
「死刑って……どーして？！」
「どーしてって、魔と言われた者の運命ですよ」
あー、ジャンヌ＝ダルクなんかもそうだったな――。
「じゃ、どうして魔王は死んでないわけ？」
「だって――死刑を決定するのは王ですよ。魔王に誰が死刑を宣告するんです？」
「……」
ううん、それは難しい問題だ。
「とにかく、なるべく早く実行に移したいんで、計画をたてないと

……」
　王子がそう言いかけたらムルーが口を出した。
「王子！そろそろ帰られないと、王が……」
「あ、そうだね。じゃ、里菜、また来ます。あっと、ムルー。里菜にここのこと教えてあげてよ。頼んだよ」
　そして、王子は走り去った。
　――しばしの沈黙の後、ムルーがいやいやという感じで口を開いた。
「――何か聞きたいこと、は？」
「え、そりゃ山程。――でも、そうだな、最初に訊いとこうかな。……ムルー、ハーレ王国がプリチュ王国に勝てると思う？」
　そんなことを訊くとは思っていなかったらしく、少々驚いたような顔で、ムルーは私の目を見た。で、私は言った。
「正直なところをさ、言ってよね」
「そう、だな。――本心で言うと勝てない、と思う。……国力が増そうと戦力が増そうと。七年前ハーレが勝てなかったのは、そのせいじゃない。――敵の前で王自ら目をつぶってしまうような国が、どうして勝てるというんだ？……そう、一番の敗因は精神力だ。そしてそれは七年やそこらで身につくものじゃない」
　ははあ、やっぱりムルーもそう思ってたか。王子がハーレの国力について熱弁してた時、王子の後ろでなんか渋い顔してたから、おや？と思ってたんだよね。
「――私もそう思う。でも『自分さえいなければ』なんて思ってる王子見てると、たとえまた負けるとしても、いっしょに脱出したいと思っちゃうな。――わけのわかんないうちにわけのわかんないところで殺されるのもやだしね」
　ムルーは、唇のはしを少しゆがめた程度の笑みを浮かべて、そして言った。
「しょっぱなっから思ってたんだが、お前は外見も中身も何か変わった奴だな。――まぁ最初は魔だからだろうと思ってたんだが……。

中でも気の強さは……凄いな」
凄いって言われると、一体どう答えたものやら。
「えーと、まぁそのー……。うん、気の強さには自信あるんだ、私」
何たって昔、痴漢さんにすら気が強いなーと感嘆（？）された程の人間ですからね、私は。（何やったかっていうと、ただ、声出すと殺すぞって脅されて、首絞められかけたんで、反対にカッター出して脅したってだけなんだけど……）
「だけどな」
ムルーが言った。
「だけど俺は思うんだ。もしかしたらってな。――五歳の時、無意識に目を開けていて死ななかったトーレ王子は、十二歳の今、意識して目を開けていても十分王と渡り合える。それだけの精神力の持ち主がハーレ王国に戻ったら、多少なりともハーレの国民に影響を与えるんじゃないか。そうしたら、もしかしたら……ってな」
ムルーの目は夢見る目だった。

五、地下牢・プリチュ王城・プリチュ王国を脱出すべく

トーレ王子にはとっても素直なムルーは王子の言いつけを守って、ちゃんと私の質問に、わかる範囲で答えてくれた。――もっとも私に対する態度が軟化したのは、私のことをどうやら魔じゃないらしいと思いなおしたせいもあるようだった。

とにかくそのお陰で、翌日トーレ王子がまたもやこっそり降りてきた時、何とか幼稚園児程度にはこの世界のことを知っていた。（でもこの世界には幼稚園ってなさそうだけどね）

「里菜、どうですか？快適、の訳ないだろうけど、元気ですか？」

「うん、まあね」

さすがに昨日一日御飯ぬいたら、お腹がとーってもすいたんで、食事に出されるやけに固いパンを、一生懸命噛んで水で流し込んだ。――味も素っ気もない食事の仕方だけど、とりあえずエネルギー源も取ったから、元気！

――まあ、実を言うとさ、おトイレずっと我慢してたら、今日の夕方頃おなか痛くなっちゃったんだけど、もうどうしようもない！って時に仕方なくムルーに聞いたら、端の石が一つ外れるようになっていて、そこに排泄するものなんだ、ということがわかって、ムルーにしばらく部屋の外に行ってもらって、事は解決した。ははは……。

「じゃあ今日から脱走計画たてに入っていいですか？」

「どうぞ」

「じゃ、何か案あります？」

思わず絶句。

「案あるかって、だって私よりあなた達の方が内情に詳しいでしょうが！」

「――貴女が来る前にも、色々二人で考えたんです。でも全部ダメ。

この城は水も漏らさぬ警備網が引かれているので。だからここは、テレポートなどという奇想天外なことを知っている貴女に……」
奇想天外ったって、テレポートなんて既に一般的な言葉だもんな、地球では。――語だけはね。
うーん、しかし逃げ方ねぇうーん……。私が思い付くような事、色々考えたっていう王子達が気付いてない筈はない、と思うけど、とりあえず思い付いたことを片っ端から言ってみようかな。
「えーとね、さっきムルー、あのお手洗いの下水、海に流してるって言ったよね」
「ああ」
「んじゃこの城って海に近いんだ」
「ごく近いです。えっと、海に面して崖があって、その崖の上にこの城が立ってるんです。で、この地下牢は、その崖の中にあるわけです」
王子が答えてくれた位置関係を頭の中に思い描いてみる。
「そうするとえっと……崖の方も警戒は厳しい？」
「いや、全然」
ガクッ。余りにあっけないムルーの答えに体の力がぬけたぞ。
「じゃあさ、ちょっと危ないかもしれないけど、崖っ淵を縄でも垂らして降りて、海から逃げたら？」
おおっと。問題外の意見だったのかな？言うや否や、何を馬鹿なことをって目で見られた。実際、
「何を馬鹿なことを」
とムルーに言われた。
「え、何。ひょっとして海に鮫でもいるとか？」
思わず尋ねたら尋ね返された。
「さめって何だ？――そうか、そう言えば国は大ざっぱに説明したけど、流浪の民は説明してなかったな。国は覚えてるか？」
うーん、本当に大ざっぱな説明だったからなー、ほとんど覚えてないけど、えーと……。

「えっと確か、大国が三つでプリチュ、イサジア、ラーサ。小国がハーレにオルファに……」
「クラバにサウニア、ウッディーラハサ、ロスエン、カランタ、エシャム、ボーグディアグ、で九つです」
と、王子が助け船を出してくれた。
「おーすごい！よく覚えてるねー」
私も地球上の国なら十二位言えると思うけどね。えっと、日本、アメリカ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、スペイン……。
確か、私はトーレ王子を誉めたんだけど、何故かムルーが得意がった。
「当たり前だ。何せ、俺が八年も仕えてる王子なんだぞ」
そうか。そうだっけね、ムルーは。――何が、そうか、というと、これも『表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんですが、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです』という台詞がわからなくて、昨日ムルーに聞いたことの一つ。
元々ムルーは腕の良い傭兵で、戦争とか盗賊退治とかいう段になると高額で働いてたんだって。ところが八年前、世界中が一時の平和状態にあって、ムルーが（どうするか…）などと考えながら旅をしていて、ハーレ王国の近くに差し掛かった時――。

◇　◇　◇

その辺は、一帯草原だった。歩いているとキャーキャーワイワイと騒いでいる一群の人間がいた。服装やら持ち物、馬車から見て、貴族が遠出をしてきたようだった。
（ふん！貴族か）
俺がそう思って通り過ぎようとした時、風が吹いて、布が飛んできた。それは、その一行の中で唯一の子供で、故に大人達が食事の支度をするのを手伝えず、一人でぽつんと座っていた男の子の、日

よけの布だった。
俺がそれを拾うと、その男の子は走ってきて、言った。
「おじちゃん！ありがとう！」
貴族の子が、大人達が誰も気付かなかったとはいえ、自ら取りにきたのが印象的だった。
貴族の子が、見るからにただの旅人とわかる俺に、礼を言ったのが印象的だった。
そして何より、人を真っ直ぐに見る澄んだ綺麗な碧い瞳が印象的だった。
俺は、思わずしゃがみこんで訊いた。
「ぼうや、名前は？」
「トーレ、だよ！おじちゃんは？」
訊き返されるとは思ってなかったので、俺は少々戸惑いながら答えた。
「ムルーだ」
丁度その時、やっとその子がいないのに気付いたらしく、大人――つまり下女の一人が声をあげた。
「王子様！どちらですか？」
そこは馬車の陰になっていて、下女の側からは見えなかった。
「はーい！今行くよ！」
その子は返事をし、
「ムルーおじちゃん！またね！！」
と言って、日よけの布を頭にかぶって走って行った。
またね、というのが印象的だった。
それに、ただの貴族の子でなく、王子だったということが、先程の印象を深めたのは当然だろう。
俺は、瞬時にその子に仕えることに決めた。
その場所と、王子の年とから考えて、ハーレの王子だと確信できたので、俺はハーレ王国に向かって歩き始めた。
つねづね俺は、そろそろ世界は統一されなくてはダメだ、と思っ

ていた。こんなに争い事ばかりしていては、どの国も自滅してしまう、と。――まあ戦いがなくては生きていけない傭兵の台詞じゃない、とは思ったが、ね。

俺は、それまでけっこう色々な王に会ってきたが、どの王も世界を統一するに足る人物とは思えなかった。だが、この王子は、育ったらそれらのどの王とも違う王になる！と思った。そしてその成長の過程をこの目で見てみたい、とも。

二時間も歩くと、ぼちぼちハーレ王国に属する村落があちこちに見えてきた。どの村にも寄らず、更に四時間程歩くと、ハーレ市を囲む石壁の、西大門に出た。

当然番兵にとどめられ、俺は推薦状を見せた。《里菜注。推薦状というのは、契約状態が終了した時、つまり争い事にケリがついた時に、契約した主（村長とか領主とか、王だったりするそうだ）が、よく働いてくれた傭兵に対し、報酬とともに渡すもの、らしい。それをもらった傭兵は別の所へ行く時、それを見せて腕と忠義とを信用してもらい、雇ってもらう、というわけ。その男がスパイだったりすると、推薦した者が睨まれるから、滅多な人はもらえないとか。その、もらうのが難しい推薦状をムルーは十一も持っているらしい》番兵は早馬を駆って城の王に取り次いでくれ、俺は城下を一時間ほど歩いて、そして城で王と会った。

王は言った。

「傭兵ムルー、だな？推薦状の文句を見るまでもなく、お前の噂は聞いていた。――若いのに大層な腕の剣の使い手だと。が、一体何用だ？知っているとは思うが、我が国は現在どことも闘争状態にはないし、しばらくは戦争になりそうな気配もない。内紛もないし、今のところは盗賊の害もない。傭兵とは争いの中でのみ働く者であろう？一体何用だ？」

もう知っての通り《とムルーは私に言った》この一年後にプリチュ王国との戦争、というか、プリチュ王国の侵略が始まったわけだが、その当時プリチュの王はまだロッフ王ではなく、そんな兆候は

微塵もなかった。
俺は王に向かって言った。
「ハーレ王、俺は傭兵をやめたいと思う。そしてこの国に仕えたい――というより、ここの王子に」

◇　◇　◇

「ちょっと」
と私は言った。
「ムルーって王様に対してそーいう言葉遣いするのー？」
「当たり前だ。王と俺は対等な立場じゃないか。俺は俺の能力を売り、王がそれを買うっていう、な」
「……理屈は、わからなくも、ない、けどねぇ……」
でも、能力を商売物、王をお客とするなら、「お客様は神様です」っていうんじゃないのかなあ……。
「砂漠を出て以来、心から仕えたい、と思ったのは、トーレ王子だけだ。王子以外の誰に敬語なんか使うものか！――もっともロッフ王は別だがね、心服してるふりをしてるから」

◇　◇　◇

「それは――我が国にとっては有難いが、どういうことだ？しかも王子の、とは？」
「別に。ここの王子が気に入っただけだ」
王はしばらく俺を見ていたが、割とあっさり言った。
「よかろう。但し、王子に仕えるとはいえ、一応表向きは我が国の兵になってもらうぞ。でないと給料も払えないし、な」
「ああ、俺もそれは当然と思う。王子に仕えるということは、結局、この国に仕えるということだし……。だが俺の忠誠はあんたにゃやらんぞ」

王はにやっと笑って言った。
「わかった」
これは後で聞いた話だが、ハーレ王はそのあと、大臣に言われたんだそうだ。
「王、忠誠も誓わぬ者を城中にあげたりしては……」
と。王は答えて言ったそうだ。
「いいではないか。あの男は、今までどんな主にも忠誠を誓ったことがないそうだ。だが一度たりと主を裏切ったことはない。――忠誠を誓いながらも逃げだす傭兵、どころか兵士も多い昨今、ああいう男の方がかえって良いとは思わぬか？あのはっきりした物言いも私は気に入ったが」
とね。――あの王は、今時珍しい、話のわかる権力者だったよ。
そして――次の日。俺は遠出から戻ってきた王子に引き合わされた。二人だけになった時、王子が俺に言った言葉が、また印象的だった。
「ね、またねって言ったでしょ、ムルー」
――俺は王子に絶対の忠誠を誓った。
そして、それからの一年で、俺はトーレ王子に仕えたのは本当に正しかった、と悟った。魔王にも対抗できるとは予想以上だった。
だが王子は魔王に連れ去られてしまった。
ハーレ王国は建て直しに取りかかったところだったが、俺はかまわず、誰にも断わらず、単身プリチュ王国に向かった。俺が一年間ハーレ王国の兵士だったことは、城内の一部の人間しか知らないことだったし、平和な時期に傭兵が一年位行方不明になるのはよくあることだから、特に不審にも思われず、プリチュ王国に入ることが出来た。
俺は、そろそろ安定した生活を送りたいから、と言い、プリチュ王に偽りの忠誠を誓って働き始め、――そしてやっと最近、王子の警護の仕事が入ってきたところだった。もっとも、お前が現われた時、丁度王子の護衛に俺がいて、俺がお前をここまで連れてきたせ

いでそのまま牢番をさせられることになって、王子の警護の仕事は消えちまったがな！

◇　◇　◇

そう話をしめくくるとムルーはぷいっとそっぽを向いた……。あれがなかなかかわいくてねー。大体、最初やけにつっかかってきたのが、王子といるのを邪魔された腹いせもあったんだと知ると……実に可愛い。二十八の男とはとても思えなかった。

その、二十八の男とは思えない奴が言った。

「――流浪の民とはつまり、そのどこの国にも属してない奴らだ」

「……ジプシーみたいなもんかな……？」

「じぷしーというものは知らんが――つまりだな！」

ムルーが苛々してそうな声でそう言うと、トーレ王子が後を続けた。

「流浪の民というのは、定住地を持たず流離う人々のことですが、ただの流離人じゃなくて、民族の代表といいますか――そういったものでもあります。その種類には、砂漠の民・アビリ、草原の民・プテス、湖の民・ミウミウ、山の民・トンム、海の民・ドニート、空の民・フィルアがあって、初めに言った二族以外はほとんど伝説上のものとはなっていますが、やはり彼らの及ぼす力は大したものです」

「は？」

ちょっと頭が……。えっと……。あ。

「民族の代表っていうのは？」

「えーと……国などが生まれる前から人間は世界中にいたわけで、その時代の居住地域とかで、肌とか髪の色とかが少しずつ違うんです」

「あ、地球の黒人とか白人とか黄色人種とかと同じ、かな」

「ええ、多分そうです。で、当時は全ての人々が流浪生活をしてい

たんですが、少しずつ定住していき、国を作り……残った未だに定住していない人々が、流浪の民、と呼ばれています。彼らは全く他の民族と交わっていない、純粋な血を持っているので民族の代表と言えます」

ははあ、人種のモデルケースってわけか。――そう言えば私も黄色人種・大和民族のモデルケースだけど。

「ちなみに僕は、いわれでは全部の民の血をひいているそうです。でもまあ、大体はハーレ国民もプリチュ国民も草原の民＞プテス＜の出ですね。ムルーは……砂漠の民＞アビリ＜だっけ？」

「はい、そうです」

「――こんな説明で、大体わかります？」

「ん――一応ね。で、その流浪の民がどうかしたわけ？」

「海には海の民（ドニート）がいる」

とムルーが言った。

「えーと、ほとんど伝説と化している民族だよね、それが？」

「海に関することは、彼らと契約しなくちゃいけないんだよ！」

「……伝説上の民族と？」

「及ぼす力は絶大、と言ったでしょう。実体はここのところ認められませんが、力が活動しているのは確かなんです」

――どこに確信持ってるのか知らないけど、古代でよく見られる訳のわからない信仰じゃないのかな。実を言うと私は、あの王が魔だというのにも疑問を持っている。だって誰かがあの人を見て死んだのをこの目で見たわけじゃないもんね。――といっても、私、現実主義者なわけじゃないんだけどね。だって別に無神論者じゃないし、あんまり関係ないような気もするけど、神話とか大好きだし。

ま、とりあえず……。

「あのさ」

ちょっと芝居がかって、牢ごしに二人にずいっと近付いてぼそっと言った。

「魔王と海の民とどっちが怖い？」

五、地下牢・プリチュ王城・プリチュ王国を脱出すべく（後書き）

ちなみに3大国の名前は、花の名前がもとになっています。
プリチュとイサジアはひっくり返すとわかります。が。ラーサだけは何の花をどうやってこういう名前になったのかさっぱり覚えていません……。

六、　脱走計画を考えた。

魔王と海の民とどっちが怖い？――私がそう言ってから、しばらく経っていた。だのにまだ二人とも、

「うーん」

と考え込んでいた。だから私は言った。

「つまりさ、現実的に見てどっちの方が危険かってことだよ？急いで逃げないといけないんだし、他に逃げ道が見つからないんなら……」

「別に急がなくてもいいんだぞ、我々は。ただお前が死刑にされるってだけだ」

とムルーが、以前ならマジで言っただろうけど、今はからかって、言った。で、私も言い返した。

「おーや。そう長期間、脱走計画を練っているのを魔王に隠しおおせるとは思えないけどねー」

「……」

やーい、黙り込ませてやったぞ！

そして王子が、静かに言った。

「……里菜の言う通り、そう長く隠しおおせるものではないでしょうね。それに僕は急いで逃げたい。急がないと……」

ん？急がないと、何なんだろう、と思ったんだけど、王子はそのまま台詞を跡切らせ、次に口を開けた時には、

「――海をとりましょう」

と言った。

ゴクッ。ムルーがつばをのみこんだ。

「ただ問題は――ハーレ城市もプリチュ城市も海の民と契約なかったから、僕泳いだことないんですよね」

うっ★――私もあんまり泳げないしなあ、うーん……。えっまさかっ

「ム、ムルーは？！まさかムルーも……」
「俺は泳げる。前に海の民と契約のある街に雇われたからな」
ほっ。よ、よかったぁ……。
「ムルーが泳げるなら、泳ぐの手伝ってもらえるし、人間の体は浮くようになってるそうだから、大丈夫でしょ。
それよりどっちかっていうともっと問題なのは……何処から海に出るかとか、崖の高さとか、岸までの距離とか……」
「あ、前々から脱走計画のために書庫から城の設計図とか手に入れておいたので……」
そう言ってトーレ王子は懐から古そうな紙を取り出した。その紙は数枚束ねてあって、色んな方向から見た城の絵らしきものとか、城の断面図らしきものとか、平面図らしきものとか色々あった。
とりあえず全部に目を通したけど、
「わかるか？」
というムルーの問いに思わず、
「わからん」
と答えてしまった。
「図はわかるけど、書き込まれてることがわかんないよぉ」
で、かなりの時間をかけて王子とムルーに一々訊いて、位置関係とかをざっと理解した。
えっと、そうすると、崖から海に出るためには、なるべく見つからないように地上に上がり、一階の窓から縄を垂らして崖を降りていかないといけないわけか。うーん、この崖、かなりありそうだなあ……。
「ムルー、この崖って高さどのくらい？」
「えーと１０テイってとこかな」
「……１テイってどれ位なわけ？」
「ああ……俺の肩ぐらいだ」
「ムルー起立！」
と言ってムルーを立たせ、私も立つ。

「えと、ムルーの肩は私の目くらいだから、大体１５０センチメートルか。ってことは１０テイは１５メートル……」
うーん、校舎の一階分が４メートルぐらいと考えると、大体四階分ってことか。――うちの学校の四階建て校舎の屋上って立入禁止になってたよなー。立入禁止になるくらいの高さ、ね……。
別に高所恐怖症ではないけれど、その高さを縄だけを頼りに降りていくのかと思ったら、少し寒気がして、思わずこわごわと崖側から見た城の絵を眺めてしまった。
あ、あれ？――絵に、さっきは気付かなかったものを発見した。
「王子、ここの黒いの何？」
崖の途中に一つ、小さい黒い長方形があるんだよね。
「ああ、それは窓です。――地下牢に続く螺旋状の階段の途中で、外とすごく近い所があって、そこの岩をくりぬいて窓にしてあるんです」
うーん、ちょっと苦しい説明だけど、何となくわかった。
「あ、そうか！あの窓から出られないかな？」
王子が声をあげた。
うん、成程。地下を現在管理してるのはムルーらしいから、地下から直接海に出れるなら、その分見つかる可能性は大分減るんだ。
「あぁ、あの窓なら――充分人一人通り抜けられますね」
ムルーが、少し考えながらそう答えた。
「じゃ、そこから、でいい？」
と私が訊くと二人ともうなずいたので、もう一度質問した。
「で、ここの窓からだと海面までどのくらい？」
「うーん、今頃だと、大潮時だし……満潮時で３テイってとこかな」
とムルー。３テイは４．５メートルだから、うん。低くなった。良かった良かった。
「それで城は出れるとして、そこから――んと川ぐらいまでは泳いでいった方がいいのかな？」
「そうですね、そのくらい泳いだ方が城の見張りに見つからないで

すね」
と王子。
「じゃ、その距離は？」
「えーと、１００テイ、かな」
ムルーの言葉に、私は唸った。
「げー、１５０メートル？私そんなに泳げるのかなぁ……」
今までの最高が確か５０メートルだよね。
「足をつける所とかってないの？」
「多分、ないだろうな」
「うーん。ま、死ぬ気でやりゃ何とかなるでしょう……。王子は？」
「頑張る」
「ＯＫ。じゃとりあえず河口に着いたでしょ。そこからは、大丈夫？」
「河口付近の崖を――ま、２テイぐらいだから楽勝だけどな――よじのぼって、後は陸路になるわけだが……やってみるしかないだろうな」
「じゃそっちの道の方はまかせるね。後は準備、か……」
「何が要りますか？必要なものはなるべく僕が集めときます」
「ん。まずね、縄はいるでしょ。登ったり降りたりするのに。あと服ね。多少なりとも変装しないといけないし、私の格好じゃ目立つでしょ」
何てったってパジャマだもんね。
「そういや、前から思ってたんだが、随分面白い服だな、お前が着てるの。大体やたらと細かく縫ってないか？」
そりゃミシン仕事だもんねぇ……。
「でもこれ寝間着だよ。普段着るのは、ここの感覚からすれば、きっともっと面白い……」
しばらく、珍しそうに私のパジャマを眺めていた王子が口を開いた。
「えーと。それじゃ旅人の服を三人分用意します。あと、資金とか

食料とか要りますね。他には？」
「んー、あ、そうだ。ここの人ってみんな髪青いの？黒って珍しい？」
「ああ、緑の人とか紫の人とかいますけど、里菜のような真っ黒の髪の人っていませんね。……ちょっと普通では考えられない髪の色ですよね」
　んなこと言われてもねぇ……。
「何とか隠す方法ない？かつらとか染めるとかターバンとか……」
「旅人の中には髪を全部布でくるむようにしている人がいますから、ね。布を用意しておきます」
「ありがと」
　あー良かった。
「となると、そういうものなるべく濡らさず持ち出したいね。この翻訳機だって濡らさない方がいいだろうし……。着替えの服もね。濡れた服なんて着て歩くと不審の元だし風邪の元。何か水を通さない袋みたいなのない？」
「――ああ！皮で作った水袋があります。それで平気ですか？」
「うん、上等。服とかが全部入るくらい用意してね。それでその口をしっかり閉めて持って――綱をつたって海に降りて、泳ぎまくって川。着替えて――で、ハーレ王国まで歩き？」
「それ以外、ないだろう。海から脱出じゃ馬を盗んでいくわけにもいかんし……」
　ムルーがぶつぶつ言った。
「歩いて何日ぐらい？」
「えーと、八日ってとこかな。隠れながら進まなきゃならないし……」
「……食料が大変だね。途中で補給できる？」
「収穫前だからな、ほとんど望めないだろう。ま、水さえあれば死にゃしないし、水は各村の井戸からでも汲めばいいし」
　私の問いに対してムルーが答えてくれて、それから王子が言った。

「幸い今年はよく雨が降って、井戸も涸れてないだろうしね。――と、僕そろそろ戻ります。決行は、いつにします？」
うーん、私達がいないことをなるべく長時間悟られない方がいいんだよね。私とムルーは食事持った人が一日二回下りてくるだけだけど……。
「王子が一番長い時間一人でいられるのって夜？」
「あ、そうですね。九時から朝の七時まで十時間」
ここは地球と同じく一日が二十四時間なんだそうだ。
「で、必要な物、何日ぐらいで集まる？」
「余裕を見ても――明後日中には必ず」
「じゃ明後日の夜九時決行ということにしよう。いい？」
「はい！」
と、明るく王子。
「ああ」
と、暗くムルー。
「それじゃまた明日！」
と言って帰ろうとした王子を、私は呼び止めた。
「あ、明日は来ない方がいいんじゃない？あんまり来てると、来てるのばれやすいでしょ」
「――そーですね。じゃ明後日に！」
と言って王子は立ち去った。
ムルーは、内側から部屋に鍵をかけると壁際に坐り込んだ。
「うーん、計画洩れ、ないかなー」
「多分な。不安といえば海の民のことだけで」
しばしの沈黙。そして私が口を開いた。
「ねームルー。海の民との契約って、つまりどんなことをするの？」
「……人身御供だ。向こうの提示した条件に見合う人間を」
「ふうん」
条件をだすってことは人肉を食べてるわけでもなさそうだし……一体何をしてるんだろう？

「――そういえば、昨日から訊こう訊こうと思ってて訊けなかったんだけど」
「なんだ？王子の御命令だから、俺は何でも答えてやるぞ。さっさと言やあいいだろ」
「……だってさー、ここの文化程度ってどのくらい？って訊いたってわからないでしょ」
「――そりゃまそうだな。俺にしてみりゃここの文化程度は普通、だもんな」
　そーだよ。基準が元々違うんだから。
「ただ、服なんかっから見て、私の国の方が文化程度高そうでしょ」
「――ああ」
「なのに何で翻訳機なんて高尚なものがあるわけ？」
「ああ、そりゃ〈先人の落とし物〉だからな」
「……なにそれ」
「つまりだな、昔この世界にはひじょーに頭の良い方々がいて、色々わけのわからん絡繰り仕掛けを残して、どこかに消えてしまった、と。この翻訳機という代物はだな、その中で使い道のわかっている少々のもののうちの一つだったわけだ」
　ふうん。じゃここは昔、遥かに高度な文明が栄えていたわけか。
「そーいう絡繰り仕掛けはわけがわからんので、今じゃ各国王城で保管されてる筈だ」
「へー面白そー」
　見てみたいなー。
「――ここのを見るのはあきらめとけ。一応こないだ翻訳機を取りに行った時、王から保管室の鍵を預かったままだが、お前が出歩くのは危険だからな」
「……はぁい……」
　くすん。残念だ。
「ま、ハーレ王国のをきっと見せてもらえるだろうし」
　ムルーは多分、慰めてくれたんだろうけど、私は思わず暗くなる

ようなことを言ってしまった。
「無事に着ければね」
「……」
それっきりムルーも私も口を開かず、壁の所に立ててある松明（なんだろうな、多分あれが。実物なんて見たことないから……）が燃えている音が少しするだけで――ほんとに暗い雰囲気になってしまった……。

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…

「うーん……あーよく寝た」
私はそう言ってむくっと起きた。何せ地下だからお日様とは無縁だし、時計はないし……で、まるっきり時間がわからない。
でも放っとくと十五、六時間は寝てる私がよく寝た、と思ったんだから、きっともう昼過ぎだろう。それにしても、いつどうなるかもわからない身で、石畳の上で布団もなくてよく眠れるものだ……我ながら感心する……。
「ムルー！おはよー！！」
言ってみたけど返事がない。ムルーは檻のある部屋の外で番してる筈で……そこにいる限り、聞こえてないってこともないと思うんだけど……。
おっと。足音だ。少し慌て気味の。
足音は私のいる部屋の前で止まり、次にはガチャガチャと鍵を開ける音。そして入ってきたのは……。
「ムルー！どーしてたの？いないから、心配しちゃった」
「ああ、俺も心配した。突然王から呼び出されたんでな。計画がばれたかと……」
言いながら檻の錠を外す。
「で結局、用件は何だったの？」
「お前を連れて来いだと！――一応、また厳重に縛るが……悪く思うなよ」
「うん勿論。怪しまれたら元も子もないもんね。だけど私に、一体何の用な訳？王は」
縛りながら、ムルーは言った。
「とりあえず脱走計画のことじゃないらしい……から、この間の続きじゃないか？」
「あの、魔がどうとやらっていう――？」

疲れるんだよね、あの問答は。

で、以前と同じく沢山歩いて、目隠しを取られて部屋に入ったら、今回は王子はいなくて、カーテンの奥で王が席に着いて待っていた。そしてムルーが退場し――王が口を開いた。

「魔よ。もう一度訊く。そしてこれが最後だ。――お前の目的は？」

こーなったら煙に巻いてやろう。

「現社会において、目的意識を持って動いている人間がどの位いるか、なんて知りませんが多分少ないんじゃないでしょうか。まあ、進学率九十八％の進学校の高校三年生としましては、とりあえず目的は大学合格というところなんでしょうけど、かといってとりたてやりたいことがあるわけでもなし……まー私は普通よりも目的意識のない高三生だと思いますが」

「……この翻訳機、壊れたのか？何だかわけのわからない言葉しか聞こえぬが……」

「壊れてませんよ、多分ね」

素直な私はそう言ってあげた。

「ということは――わけのわからないことを言って一体どうするつもりだ？何か事態が進展するとでも？」

「いーえ別に。遅れも進みもしないでしょうよ。でも別にわけのわからないことを言ったつもりもありませんがね」

「……もう一度だけ言うぞ。目的は何だ？」

「おーや、さっきのが最後じゃなかったっけねー？」

「ふざけるのもいいかげんにするんだな」

「間違ったことは言ってませんよ。そーですね、でも真面目に言えというのなら……本心を言ってみましょうか」

で、思いっきり息を吸い込む。どーせ本心を言うのなら、本心並の音量で。せーのぉ、

「んなもんないって言ってるだろ！！このすかたん！！！」

あーあ。ばいばいと言っただけで叱る、うちのがっこの校長先生

が聞いたら、絶対怒り出す言葉遣いだな。
「――お前の本心はよくわかった。そしてお前の未来も決まった。――処刑だ！明日の……正午に」
あした……？ま、まずい。せめてあさってにしよう！明日の夜逃げるから。
「いや、待てよ」
そ、そうそう。考え直そうねっ。
「お前は、私の顔を見るという言葉を恐れなかったんだったな……。興味がある。一度、私の顔を見せてみよう。万一生きていたら……お前はトーレを気に入ってるようだし……丁度良い。トーレの母親になるんだな」
母親……ははおや……ってことは、ええー冗談じゃない！十七才で十二才の子の母親になってたまりますか！――いや待てよ、論点がずれてる……そーだ、どーして好きでもない奴の奥さんにならにゃあかんのだ！冗談じゃないっ！
……っていうのに……王はムルーを呼ぶとこう言った。
「明日の正午に私の寝室にそいつを連れて行け。――処刑になるかどうかは、まだわからぬが、な」
し、しんしつだと～～。冗談ではない！というのだ！！
でもまだ明日で助かった～～今日これから、じゃ、何の手も打てないとこだった……。顔を見せること、すなわち処刑、になるかもしれないから、予定の時刻は変わらなかったのね……。
えーと、顔見せられても死なない自信はあるけど――だけど、どういう根拠で自分の顔（？）にあんなに自信持ってるのかね、あの王は。やっぱ過去の実績かしら。とするとやっぱり危ないかなぁ……うーむ。
いいや！誰が死んでやるもんか！！しかし、死んでやらないにしたってあんな奴の嫁さんになるのはごめんだ。とするとやっぱり……手を打つしかないだろうなあ……。
そんなことを、牢に至る道中考え続けて、で、牢に着いて目隠し

が外されるなり私はムルーに言った。
「ムルー！王子と連絡とって！全部揃わなくてもいいから、物を揃うだけ揃えてって」
「じゃあ……」
「私の都合で予定変更して悪いけど――今夜決行よっ」

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…（後書き）

そういえば、一番最初、このサブタイトルは「しかして、……」でした。読んでくれた友人に「しかしてってそしてって意味だよ」と指摘されて、「しかし、……」になったのでした。知りませんでした、「しかして」の意味。

八、とりあえず逃げ出した、のはいいけれど

夜。何時だかわからないけど、とにかく夜。私は階段の途中の窓の下にいた。

灯りといえば、窓からわずかに差し込んでくる月の光ばかりで、暗い。まあ、かなり目は慣れたけどね。

「王子、どうしたのかな。うー、一人でいると悪い想像ばかりしちゃってよくないわ……」

呟いた途端に螺旋階段の上から足音。そして王子が現われた。

「すみません、遅くなって。何しろ大荷物だから人目につかないよう持ってくるのが一苦労で……。あれ、ムルーは？」

と、サンタさんのように荷物を抱えた王子が言った。

「えっ会わなかった？私をここに連れて来て『ちょっと待ってろ』って言って行っちゃったから、てっきり王子を迎えに行ったんだとばっかり……」

「いえ、会いませんでしたけど……。行き違ったのかな……。まぁ何かあってもムルーなら大丈夫でしょうが……」

「そーお？じゃこの間に荷物点検しとこうか。揃った？」

「はい、大体」

で、広げてみると……大袋の中に中袋と小袋数枚。長い布も数枚、お金（だろう、多分）の入った袋、食料らしきものの入った袋、地図、服三着、綱……。

「――随分立派に集めてくれたね。時間もなかったのに。大変だったでしょう」

王子はにこっと笑って言った。

「それほどでも」

嘘だね、やっぱ大変だったと思うよ。それを口に出さないとこなんか、十二才とは思えない偉い子だよね。ムルーの誉め様もわかる気がする。

「あと適当に使えそうなもの持ってきました。松明とか火打ち石とか小型だけど弓矢とか短剣とか」
おー、よく気のつく子だ。それにしても――。
「ムルー遅いね」
「そーですね。あ、でも足音ですよ」
コツコツコツコツ。
「遅くなってすみません、王子」
ムルーは手に何やらごちゃごちゃ持っていた。
「どーしたのムルー。――何持ってる訳？」
王子の問いに、ムルーは
「ああ、どうせ行く先々で必要になると思って翻訳機を幾つか持ってきたんです。それと――」
と言ってから私の方を向いて、何だか色々なものを手渡してくれた。
「興味、ありそうだったろ。お前なら使い方わかるかもしれんと思って、小さい物を適当に取ってきた」
えっわざわざ？翻訳機だって私のため、だよね、結局。
「有難う」
「いや、脱走に役立つ物もあるかと思って――」
と、ムルーはそっぽを向いた。はは、照れてるのか。
えーと。――何か見覚えのある物が多いな。ライターでしょ懐中電灯でしょ腕時計でしょ。ありゃこの時計ちゃんと動いてる。地球と同じく十二が上で三が右で……という見方でいいんだったら九時三十五分ってとこかな。――ちょっと、これ古代の物じゃなかったっけ。何だって今まで動いてんのよ！
うーん、今の地球より高度な文明だったみたいだからなー、永久電池でも発明されてたんだろ。
それにしても、随分地球と似通った文明だったんだなあ。こんなに機器が似てるとは……。
えーと、こっちのは――おっと。
「おい、見るのは後にしろ。早く行かないと」

「あ、ごめん」
私がさぼってる間に既に荷物が三つに分けられていた……。で、余っていた小袋の一つにムルーが持ってきた翻訳機その他を入れて、更にそれを私が持つ分の中袋の中に入れて――。
「あ、王子。王子の分の荷物、私が持つよ。貸して」
「え、どうして？」
「王子泳いだことないんでしょ。泳ぐことに専念した方がいいよ。私も泳ぎ自信ないけどとりあえずは泳げるから……」
「だったら俺が荷物を――」
「ムルーは王子を連れてってよ。助ける人がいれば、泳ぐのも大分楽なんじゃない？――浮き輪でもあればいいのにね……」
ま、無い物のことを言ってもしょうがない。
「使ってる翻訳機も袋の中に入れちゃおう」
という訳で、その後は会話が不可能になった。王子とムルーは何やら喋っていたけど、わかる筈もない。
そして無言で、脱走計画は開始された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5959w/

異世界冒険譚（あなざわーるどあどべんちゃー）

2011年10月10日03時22分発行